

# ジャーナリストの視点から 手と手をつないで

No.333

にし お のりおみ  
西尾 紀臣

(福岡県・福岡市人権・同和問題研修の講師団講師)  
(元毎日新聞社記者)



## 自分のことが好きですか

人権問題をテーマに話しながら、自分に問い続け、考え続けてきたことがある。人として一番、大切なことはなにか、ということだ。それは、他者との関係であり、人と人との豊かにつながっていくことではないだろうか。それがあって初めて自分の豊かな人生を作っていくことができる。忘れ得ぬ鮮烈な体験がある。

佐世保支局長として赴任した直後、近くの老人ホームで所長に聞いた話だ。お年寄りのところに訪ねてくる人を見ると、お年寄りの人生が全部、見事に見えますよ、と言うのである。

あるお年寄りのところにはひっきりなしに、訪問者がある。別のお年寄りのところには縁者はおるか、だれ一人訪ねてこない。でも、必ず人が訪ねてくる時がある。亡くなった時だ。嫌々やってきた縁者たちが、遺体を前にして引き取りを押しつけ合う。「ですが、こんなのはまだいい方ですよ」と。辛く、醜いのはなにかしかの財産を

残した時だ。遺体を前にかみ合いが始まることもあった。この所長、そのたびに「外でやってくれ」と怒鳴ったというが、今に残る言葉である。人と人とのつながりを切っていくと、当然、そんなことになる。人と人とのつながりの大切さを実感した体験だった。

そこで、差別とはなにかというと、相手にさまざまなレッテルを張って、人と人とのつながりを切っていくこと、それが差別だ。そんなことを重ねると、どんなことになるか。思い出すのは14年前、大阪の附属池田小学校で、8年の子が刺殺された事件だ。

犯人は仕事仲間とのトラブルが絶えず10数回転職、暴言と暴力で5度の結婚、離婚を重ねた。最後は一人になり「世の中のやつはみんなおれの敵や」と叫び、犯行の動機を「最低の自分に殺されることの惨めさを、みんなに味わせてやりたかった」と供述したが、自尊心のなさに背筋が凍った。

昨年、104歳で亡くなった詩人・まど・みちおさんに『そうさん』の詩がある。「おはながながいのね」とからかわれた子ぞうが、相手の指摘をす

べて受け入れ「そうよ、かあさんもながいのよ」と答える豊かな自尊心、おらかさには救われる。アトランタ五輪で銀メダルをとった有森裕子ありもりゆうこさんが「自分をほめてやりたい」といった言葉とも重なる。

あなたの周りにいる子どもであっても、大人でも、人間探せば必ずいいところが1つはある。そこを見つけて「いいね」「すてきだよ」、ほめてやる。自分を含めそのいいところに、とことん磨きをかけることだ。

自分が好きになること。簡単なようで難しいことだが、宗教の世界が究極の目標とする「悟り」とは、自分が好きになることではないだろうか。

